

植物の分布について

京都大学 北村四郎

ハマベノギクについて

ハマベノギクは菊科の植物で、葉はへり形で肉質である。海岸の砂地に匍い8月頃から11月頃にかけて開花し、本県の海岸にもある。本県では故田代善太郎氏の手により淡坂海岸で始めて採集された。本州に於ては能登半島から福井県を経て西の方へ日本海岸に沿つて南下し、山陰、九州の西岸に分布をしている。これをイソノギクと云う方もあるがイソノギクは琉球に分布するもので頭状花のへりの花の冠毛が長く、へりの花の冠毛の短かいハマベノギクとは違ふ。又このハマベノギクに良く似たものでソナレノギクと云うものが四国西端に極く狭い一部に分布している。ソナレノギクの方は地に匍はない、畑に作つてみたがまんじり型に枝分かれして、葉はへり形でやや肉質である。此等の海岸に分布生育するよく似たノギクは何から発生進化したのであろうか。

中国地方から近畿地方にかけて分布するものにヤマヂノギク云うのがある。伊吹山等にもある。これは地に匍う率なく葉は薄い。西日本から中国、台湾、満洲、朝鮮に分布している。

祖先型の植物は分布が広範囲にわたり、それから派生したものは、局所局所の環境に適應したのものとして発生すると云うのは *Willd.* の法則で、近年きびしい批判を受け、一般にはあてはまらぬと云われているが、ヤマヂノギクの場合にはこれにあてはまる例のうに思う。無論あてはまらない場合もある) 海岸の環境に適應して、浜風に対して地に匍い肉厚の葉を有する様になり、ハマベノギクとなつたとも考えられる。分布の経路は海流に沿い南から海岸沿ひに北進したと考えられる。

高知県の蛇紋岩地帯に、ヤマヂノギクと云つて葉の細いもの少ないものがあるが、これもヤマヂノギクから出たものと思はれる。

しかし分布の広いものが常に祖先型とは限りぬし、又海岸植物がすべて南から北進したとは限りぬ。バラ科のハマナスは北から南へ、島によつて運ばれたと思はれる。ハマベノギクの場合には果実の構造(冠毛を有する)等から考へて風及び海流によるものと思はれる。

ツバキに就いて

ヨーロッパで今から百年程前にツバキの栽培が非常に流行し、有名な権座の小説も主れた。それから一時熱が冷めたが現在又、アメリカ各地にツバキ栽培が流行し始めている。ツバキは本邦では東北地方の海岸地帯から南は、

九州迄分布している。古來髮油、食用として珍重された。本県では海岸に分布するのはヤブツバキであるが、山地え入ると海拔400米位の所にもツバキが見出される。この方は恐らくユキツバキだろうと思う。ユキツバキは東北地方に於て、本田正次博士により命名されたもので、普通のものより稍々背丈が低い。

冬季雪に覆われると、雪で被覆された部分は外気に曝されている所より保温されるので、雪中に入つた部分の枝は生き残り、上に出た所は枯れるので背の低いものとなる。背が低いだけでなく花弁がやゝ狭く、又普通のツバキは花が完全に開かず、やゝつぼんだまゝの状態であるがユキツバキは完全に開いて咲く。尚萼片の背に縦にすげがある。雄蕊の花糸の筒が黄色である。このユキツバキは積雪による特殊環境に適應して生じたツバキの亞種であると考えらる。恐らく本県の400米以上の高さにあるものは、ユキツバキであるだろうし、金沢附近まで南進して来ると、金沢大学の正宗巖敬博士が云っているから、此の南限界は福井県内にあるだろう。福井県で、その分布を良く調べていたゞきたい。尚ユキツバキは三月頃開花する。又、ツバキの種子は一度乾燥すると発芽し難くなる。

イワギクに就いて

100年程前に書かれた、飯沼欲齋の草木図説と云う書物にイワギクと云うものがあつている。根出葉があり、茎は2・3枝を分岐し、その梢頭に花をつけ、葉は細かく裂けている。明治に至り牧野富太郎博士が加賀白山で採集し、*Chrysanthemum habusanense* と命名した。後に大野郡石徹白村で、石徹白氏と云う人が採集した事を報告して居り、又昭和8年北陸大演習の際に鳥岳で採集されている。

7・10月頃に白色の花を開き高さ40程位である。険しい岩壁に生ずる。その後、紀伊半島の大台ヶ原山大蛇岩で安井直康氏が採集した他四国、九州宮崎県の洞ヶ岳、鹿児島県開聞岳、長崎県平戸島、朝鮮濟州島、金剛山等にもある。鳥岳では海拔1500米位、平戸島では海拔3・4の米、朝鮮では平地にある。

この様にどびどびに離れて分布して居る状態を隔離分布と云うが、此はどうして生じたのだろうか。

ずつと昔の事、大陸と本邦がまだ陸続きで気候寒冷だった洪積世の頃に、火山の裸地や植生の悪い所を伝わつて大陸から本邦へと分布して来たが、その後本州が島として分離し、気候も温暖となつて暖帯では、シイ、カシ、温帯ではブナの如き旺盛な群落を作る植物の進出の爲、現在の如き岩石地に追いやられて、残存植物として離れ離れに残つたものと見られている。以上の様な分布のしかたから見ると、前に述べたハマベノギクは新興種族であり、

イワギクは云はゞ斜陽族にも相當すると云えよう。しかしこのイワギクも蒙古、シベリヤでは未だ相當に繁榮している。残存植物として最も代表的な古いものは、裸子植物のイチョウであろう。尚イワギクはシベリヤを越え西の方、ヨーロッパのカルパチヤ山脈まで分布して居り、今ではイワギクに、*Chrysanthemum Zawadskii* の学名がつけられて、この名が最も古い学名であるから、現在では種名の *hakusanense* は止めて *Zawadskii* を用いている。

栽培種のキクの祖先は、イワギクの仲間ヒシマクンギクとから交配により中国中部で1200年位前に得られたものであろう。日本の栽培の場には色々なものがあり、比にノジギクなどの系統も入っている。

残存植物は、やたらに採集すると絶滅する。所謂高山植物も残存植物であるから、今後とも注意してやたらに採集しないようにして載きたい。

(質問) リュウノウギクとワカサハマギクとは、どう云う英名が違うのですか。

(答) リュウノウギクの海岸環境に適応したものがワカサハマギクで、下斗米氏に依れば染色体も倍加していると云はれる。ワカサハマギクの方が葉が厚くて大きい。〔清水寿久雄記〕

古地圖と地質圖

金沢大学 市川 濱

地圖は文化のバロメーターであると云はれる。立派な地圖が出来た事は、その基礎として立派な文化のある事を意味し、又それを基礎として更に立派な文化の生まれる素地ともなる。故に日本では何時頃から地圖が作りられたかと言う事を知るのは我國文化の姿を知る上から、大いに意義のある事である。かゝる目的から見る時は、対象とされる地圖は、大名や將軍が軍事的等の特殊な目的で作らせに肉筆の局部地圖は珍しいかもしれぬが、一般庶民の文化に取つては無関係なものであつて意味がない。庶民の文化と関係ある身には、多数生産され、多くの人に流布される事の出来るもの、即ち、木版刷りのものでなければならぬ。そう云うものとして最も古いと思はれるものに、所謂「行基圖」と呼ばれる日本全圖がある。表には「大日本国全圖」と書かれ、かなり広く巻向に販布されて居り、僧行基が作ったと伝えられる所から俗に「行基圖」と稱せられているが正しくは行基の作ではない。此の地圖は寛文年間(約290年前)の出版で、當時の日本の各国の輪廓が丸く示され、その中に國名と主な都市が記入してあり、上下即ち南と北が現行の地圖と逆になつて居り、本州の南方に女人島と云うのが設けられ「此の島に行きたる男子生きて帰ることなし」と云う詭がつけられている。